

I. Message

おはようございます。先週で、使徒言行録の学びはすべて終了しました。最後に、いくつかのことを振り返りたいと思います。まず、**使徒1:1-2**は、ルカの福音書を指してこのように語ります。「**1:1 -2**テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。」

ここに記されたとおり、ルカの福音書はイエスの人生の記録です。使徒言行録は、救いの福音に関する歴史をつづったルカの福音書の続編と言えます。両方ともテオフィロという人物に宛てて書かれました。この人は、パウロによる皇帝への上訴に関わったローマ帝国の役人だった可能性があります。このテオフィロという名は、直訳すると「神の友」という意味です。つまりルカは、神と親しい交わりを望むすべての人に向けて語っているのです。ルカは冒頭で、目撃証言や詳しい調査を重視していると強調します。ルカ**1:4**で、その目的についてこう記しました。「**お受けになった教えが確実なものであることを、よく分かっていたいただきたいのであります。**」

ルカの福音書の焦点は、イエスの生誕、教えと奇跡、死と復活、および昇天について真実を明らかにすることです。これによって、私たちは確信を持ってイエスを信じ、従うことができます。使徒言行録は、イエスの昇天された後、福音がどのように広まっていったかについて語ります。一見、使徒たちの働きが使徒言行録の中心だと思えますが、よく見ると、実際には聖霊の働きにスポットを当てていることが分かります。使徒や弟子たちによって働きは成されましたが、力を与えているのは聖霊です。



使徒言行録の主題は、**使徒1:8**に掲げられています。「**あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。**」使徒や弟子たちは、イエスの福音を地の果てまで携えていきますが、それは聖霊の力によってのみ可能となります。こういうわけで、ルカの福音書はイエスの働きの記録であり、使徒言行録は聖霊の働きの記録であると言えます。

キリストの十字架の神学について考えてみましょう。神が十字架上でこの世の罪を裁かれたことを私たちは知っています。神の裁きはこの世の終わりに下されると思いがちですが、イエスを信じる者にとっては、私たちの罪はすでに裁かれ、その代価は支払われました。これはイエスの十字架によるものです。信徒は洗いきよめられて、天国の国籍を頂きます。こうして、神の御国は目に見えなくても、この世に実在するのです。



罪や苦しみ、死に支配される堕落した古い世は、再臨まで続きます。しかし、新しいこと

が始まりました。聖霊の力により、神は私たちの心の中にご自身の御国を建設してくださいます。私たちが聖霊によって歩み、日常生活で聖霊の実と力を発揮するなら、この世の人生でも神の御国の祝福にあずかることができます。神を王と据えた生き方は、私たちに祝福し、励ましてくれます。また、この世への証にもなります。

イエスの降誕後、再臨までの期間を教会時代と呼びます。この時代、おもに教会である私たちをとおして神の愛が世に示されます。使徒言行録は、初代教会の誕生と成長の歴史をつづった記録です。

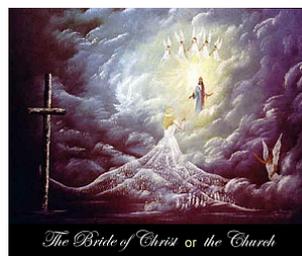
聖書が書かれた時代、ユダヤの文化では、人は30歳になって初めて成人と見なされました。使徒言行録に記された歴史が約30年間に及んでいることから、この書物が教会の誕生から幼少期、青年期を経て、大人の第一歩を踏み出すまでの記録であると言えるでしょう。少女の成長を綴った日記のように、使徒言行録は、教会が規模も成熟度も増し、キリストの花嫁とされていく様を描きます。



キリストの花嫁という表現は、イエスと私たちの絆にみられる深い愛と喜び、一致を物語ります。天地が創られる前から、神は御子なるイエスと教会をひとつにしようとしてご計画してくださいました。ここに、神が男と女を創られた理由の一端が表されています。最高の結婚生活の最高の瞬間を経験することで、天国を垣間見ることができるのです。



教会と神の聖霊がともに、イエスにつながりなさいと人々を招きます。黙示録22:17にはこうあります。「“霊”と花嫁とが言う、『来てください。』これを聞く者も言うがよい、『来てください』と。渇いている者は来るがよい。命の水が欲しい者は、価なしに飲むがよい。」この招きは、愛や喜び、平安に渇く人すべてに向けられます。キリスト・イエスとつながることで、私たちの渇きは癒され、人生に真の充足感を見出すようになります。



教会の物語が完結するのは、盛大な婚礼の日にキリストと花嫁がひとつにされたときです。黙示録19:7はこのように励まします。「わたしたちは喜び、大いに喜び、／神の栄光をたたえよう。小羊の婚礼の日が来て、／花嫁は用意を整えた。」婚礼の日を迎える前に、花嫁である教会は用意を整えなければなりません。つまり、完全に成熟するということです。使徒言行録には、教会が聖霊の力によって生み出され、聖霊の力によって成長した様が記されています。教会の人数が増え、あらゆる地域に広まったことは、その一部に過ぎません。基本神学の形成や教会生活と働きの原型はさらに重要な部分です。

先週見たように、使徒言行録のエンディングはずいぶん唐突です。まるで、物語の途中で書くのをやめてしまったかのようです。そこには歴史的な根拠がありますが、未完のままであることは、物語が今も続いていることを表します。すべての教会が、使徒言行録に新しいページを加え続けるのです。イエスが花嫁を迎えに来てくださるその日まで、教会は成長しつづけます。私た

ち自身も教会ですから、その日に備えて準備しなければなりません。

聖霊が力をもって弟子たちに臨まれた時、教会は生まれました。使徒2:4 「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。」ヨエルの預言が成就したのです。ペトロは力強く語り、3千人の人々が新たに教会に加わりました。

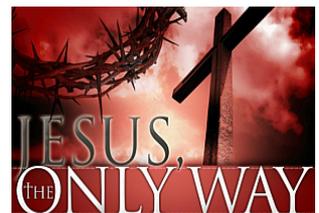


ペトロが語った内容の中心は、イエスとその死および復活です。使徒2:22-24 「2:22 イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおります。2:23 このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえて、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまっただけです。2:24 しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。」



ペトロのメッセージは、キリスト教の説教のひな型となりました。このときから、イエスの来臨と十字架上の死、そして復活が、教会の伝道メッセージの核となりました。この様式は、使徒言行録の時代から今も続いています。キリスト教信仰の中心は、イエスであり、イエスの死と復活です。イエスなしにキリスト教信仰は成立しません。イエスがおられるので、他のものは何も要りません。

使徒言行録および聖書全体が、唯一キリストを強調します。使徒4:12ははっきりと宣言します。「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」この教えに納得できない人はたくさんいます。それは、救いに至る道はたくさんあると人間社会に教えられているからです。どの文化でも、人は天国へたどり着く方法を模索し、あらゆる哲学や宗教を編み出すことで、天国に届く橋を架けようとしています。



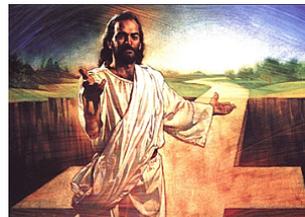
一方、聖書は人が作った宗教や哲学の教えではありません。聖書は神のみことばです。イエスによって差し出された救いは人からではなく神からのものです。この写真をご覧ください。この橋は島から本土に向けて架けられたのでしょうか。違います。それは不可能です。この島には橋を作るのに十分な木材が存在しません。この橋は、本土から島へと架けられたのです。



この例を当てはめて考えてみてください。天国は広大な大陸で、この世は小さな島です。人は天国への橋を架けることはできません。この世には、ふさわしい材料

が十分でないのです。天と地をつなぐ橋に必要な材料は、聖さや完全な義だからです。罪と死に支配された墮落した世では、それはめったに見ることのないものです。橋を築く聖さや義は、天から与えられるしかありません。つまり、天からしか橋を渡せないのです。

イエスは、この世の罪のためにささげられる罪のないいけにえとなるために、天から下ってきてくださいました。橋の建設に必要な聖さと完全な義は、イエスのうちにありました。イエスが私たちの罪のためにご自身の命を十字架上でいけにえとしてささげてくださいました。こうして、イエスが橋を築いてくださったのです。今、イエスは私たちを永遠の命のほうへと渡るように招いてくださいます。マタイ11:28「**疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。**」



十字架上で、神は多大な犠牲を払って、完全な橋を与えてくださいました。それは、罪と苦しみの島から天国へと私たちが渡れるようにするためです。他に橋はあるでしょうか。人が作ることはできません。そのような橋を作るために、聖さと義を蓄えておく場所はこの世にないからです。また、神が橋をもうひとつ作る必要性はありません。十字架という橋が、すべてのニーズを満たせるからです。

イエスによって差し出された救いは、他に例のない独自のものです。イエスを抜いて救いはどこにもありません。これは、初代教会が決定した基本的教理のひとつです。使徒たちは神の愛の証を十字架で見ました。また、よみがえったイエスとも会いました。使徒言行録は一貫して、イエスを唯一の救い主と語ります。人はこのお方によってのみ救われると主張します。この信念に突き動かされ、彼らは行く先々でイエスを告げ知らせました。

しかし、福音が広まるにつれ、新たな疑問が持ち上がりました。伝道者たちは、すべての人に福音を分かち合うという決意を何度もしなければなりません。まず、フィリポはイエスの名をサマリアの人々に知らせようと決めました。多くの人が信じて洗礼を受けました。ユダヤ人は何世紀も前からサマリア人に対する偏見を持っていたので、サマリアで伝道するというフィリポの決意は、聖霊がイエスを信じる信徒たちの心を変えてくださったことを示します。



フィリポは再び聖霊に導かれ、エチオピアの宦官に伝道しました。イザヤの書を読むその人を見て、フィリポは読んでいる内容がわかるかと尋ねました。彼はわからないと答えました。使徒8:35はこう語ります。「**そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。**」ここに登場する異邦人に対してフィリポが示した愛によって、福音はエチオピア全域へと広まりました。フィリポがサマリアやエチオピア人に分かち合ったことで、ユダヤ人以外の人々への福音の流れが始まりました。とは言え、エチオピア人やサマリア人も聖書の神を信じる人々であっても、ユダヤ人と異邦人を分かつ壁は完全に取り去られたわけ



ではありませんでした。

イエスがすべての人の救い主であることを決定付けるできごとがもうひとつあります。神はペトロに幻を見せました。その中で、清くない動物が出てきて、ペトロにほふって食べなさいと勧める声が聞こえたのです。最初、ペトロは拒みましたが、主がこうおっしゃいます。**使徒10:15**「すると、また声が聞こえてきた。『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。』」この幻によって、ユダヤの食物に対する律法は、クリスチャンの間には適用されないと教えられたわけです。この幻はさらに重要なことを使徒たちに教えました。それは、異邦人にも心を開くべきであることです。



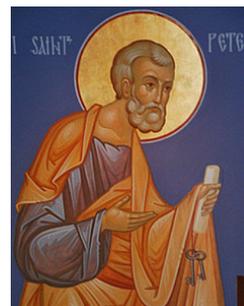
この直後、ペトロはイエスについて語ってほしいとコルネリウスの家に招かれました。ペトロはそれに応じ、聖霊がその場にいたすべての人に臨まれました。ペトロはそこで起こったことを他の使徒たちに説明した上で、こう言いました。**(使徒11:17)**「こうして、主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなさるのをどうして妨げることができたでしょうか。」これに対し、人々はこう応えました。**(使徒11:18)**「この言葉を聞いて人々は静まり、『それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ』と言って、神を賛美した。」

今日では、イエスの福音がすべての人々に開かれていることは明らかですから、ここで使徒たちが下した決断の重要性を私たちは見落としがちです。イスラエルの歴史を見ると、ユダヤ人に脈々と流れる信条がありました。それは、モーセの律法と割礼を受け入れ、ユダヤ人になることによってのみ人は救われるという考えです。しかし今、まずユダヤ人になるという条件を満たさずに異邦人が神によって救われている事実を教会が認知しはじめたのです。それからまもなく、アンティオキアにて福音が異邦人へと語られ、多くの人が信仰を持ちました。

こうして、アンティオキアの教会があらゆる国へと宣教師を送り出す下地ができました。ほどなく、主がバルナバとサウロを送り出すよう導かれました。これは、ダマスコへの途上で主がサウロに現れた後のできごとです。サウロが本当の意味で使徒パウロとなったのは、こうして送り出されてからです。パウロの働きを今日ここでおさらいすることはしませんが、3度の宣教旅行とローマへの旅をとおして、彼が新しい教会の成長に大きく貢献したことは皆さんもご存知のとおりです。



使徒たちは、神が救いを異邦人にもたらしておられることを認識してはいましたが、福音とモーセの律法との関係性についての疑問はたびたび持ち上がり、使徒15章でやっと解決しました。**使徒15:11**に登場するエルサレムの議会で、異邦人も律法に従うべきだという提案に対し、ペトロはこう答えました。「わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです。」



この後、クリスチャンはモーセの律法の下にはないことが議会で議決されました。ここまでで話した3つの基本的教理は、今も昔も教会成長に不可欠です。(1)イエスが唯一の救い主である、(2)福音はすべての人に開かれている、(3)クリスチャンはモーセの律法から解放されている。



使徒言行録を読んで、教会が新しい地域に生まれるという外面的な成長にまず気づくでしょう。一方、教理や慣習における成長も、教会が成熟する上でなくてはならない要素です。聖霊の働きに関する教理、十字架と復活の性質、そして長老や執事の任命などの習慣をはじめ、多くの基本的な教えが、使徒言行録から発展しました。ただし、教会成長の初期に中核となった教理は、すべての人への救いの告知です。それは、キリスト信仰のみによる救いであり、律法からの解放も意味します。

II. むすび

これらはすべて、イエスの人生、死、そして復活という歴史的事実に基づくものです。使徒言行録の時代から教会は成長しつづけ、今日では世界人口の三分の一がクリスチャンだといわれます。こうした教会の成長は日々続いています。私たちはどうでしょうか。今朝ここにいる人は、大半がクリスチャンです。しかし、私が祈るのは、ここにいるすべての人、そして私たちの身近にいる人が皆、イエスの福音を信じて救われることです。



もしまだ信じる決心をしていないなら、今日こそ神が与えてくださったチャンスかもしれません。罪の赦しと永遠の命を無償で受け取りましょう。使徒2:21でペトロはこう宣言しました。「主の名を呼び求める者は皆、救われる。」これは今、あなたに与えられた言葉です。祈りましょう。

III. 祈り